

IV-40 沖縄の城 - その石塁について (1)

北海道大学工学部 正員 小川 博三
琉球大学理工学部 正員 O上 間 清

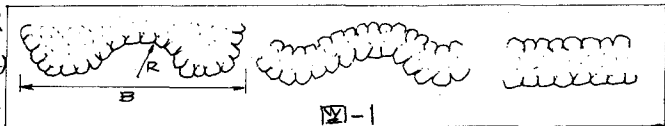
I はしがき 沖縄はわが国の中であって、特異な歴史、文化的、社会的な展開を経てきた。たとえばその歴史における時代区分については、原始・古代～近世～近代・現代とこれ、一般通説で一つの時代区分である中世に対応する区分がない。これについて文献は⁽¹⁾「沖縄の歴史と日本本土の歴史との間に一定の格差があり、たとえば本土の中世と同じ時代の沖縄をただちに同視して中世と呼ぶことができない。最初の公認史では6～10世紀、平均して8世紀ばかりの遅れがある」と述べている。沖縄における古代から近世への急速な展開は、一筋において文化的事象を歴史的時間軸の比較的短い期間に定位させ、厚みを止まらしめる効果も果したようである。そこで研究の対象とする沖縄の城⁽²⁾についても、一般通説の説く、上代～古代～中世～近世という展開を見せていず、沖縄史という「グスク時代」の含まれる古代にその大部分が築造されたものであるといわれている。また、その発生展開については、戦い、防衛が主要な要因と指摘される本土の城の場合と異なり、今日でも研究上論争はあるものの(いわゆる「グスク」論)沖縄の城は聖域としての核から発展形成されたという有力な説がある。筆者の一人(小川)は諸説を踏まえ、沖縄の城の形成について論じている。

ともあれ「古代」としての歴史位置を占める沖縄の城は、築城史、集落都市発生、また土木建築の技術史など多面的な研究の対象として重視されている。今回は、建築的合野に比較して、従来研究の進展が十分でなかった土木構造物としての一面に焦点を当て、その中心である石塁について調査研究を開始したのでこれまでの成果を報告したい。

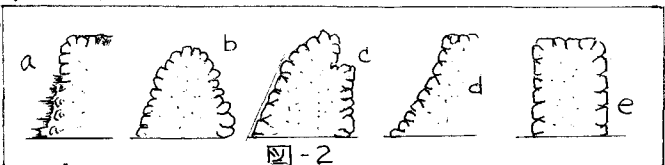
II 調査と結果 城と称されるものの数は県内に100とも200ともいわれ確定した数字はない。今日でも発見がつづいている。その大部分は、沖縄本島の中央より南部、いわゆる現地という中南部地域に分布している。本土に比較し面積当りの分布密度が極めて高い。今回の調査はこれらのうち、国指定の文化財である9城(知念・兼良・安慶名・今帰仁・聖喜味・中城・勝連・豊名川・首里)に南山城を加えた10城の石塁について調査を実施した。調査の項目は、地形及び平面形状、断面構造、及び石積工法である。

(1) 地形及び断面形状 平地に近い丘(南山の例)から急峻な山頂まで標高的な城位置の分布は50 mから150 mの間にあり、自然山頂を主として利用している。城位置の選定にはそれぞれの時代でそれぞれの条件が、たとえば城内の生活、軍略、領民支配、あったのだろうか。中でも水害と排所、それに武器の発達状況は支配的であったと思われる。沖縄の城の場合排所の存在は特に顕著である。勝連城の如きは4埋様の現存域内に3ヶ所も排所が存在する。城域の面積は安慶名城の0.8 haから大は首里城の9 haと様々である。一般に規模は小さい。城郭石塁の平面形状は、不規則円形(兼良名城)不規則楕円形(中城城・首里城・ほか)が多く見られる。これらの形状は城郭史的にみて自然地形に支配された古い時代のもりに属し、本土におけるヤシ(卑地・北海道)神龍石(北九州)の平面形状と地域・歴史の類似と見させる。しかし、ヤシは土塁であったし、空堀も有しているが沖縄の城はその何れも有していない。神龍石は比較的大い石を用いた石塁を有し、必ずしも頂上のみでなく中腹にも造られている。諸説の中にその発生について、ヤシ・神龍石・沖縄の城の何れも聖域説・聖域説が主張されているとは共通している。このように類似点と相違点が交錯しているのであるが研究上興味ある点である。石塁平面形状の細部についてみると全体的に丸みをもつ曲線・曲面が主注をなし直線と平面の利用は城門附近・城内通路

のアーチ附近を除いて削的であった。石壁南部も角とはならず曲である。他の今一つの隆だった特徴は、凸凹曲構造と蛇行構造が指摘できる。これらの略図を図1に示す。曲構造(a)は必ずしも全ての域に見られるわけではないが最も顕著な例として中域域。その他座喜味、北山、首里などに見られる。中域の場合Bは25M、Rは4M前後であった。この曲構造について何の目的でつくられたのか他の研究でもまだ明らかではないが、少なくとも構造的強化を図るための必然性はないように思われる。蛇行についてともその山～山(谷～谷)間隔が狭いもので2M前後からあり、ある作厚が感じられる。地形との最もな一致性を追求したのか、他の理由によるか、凸凹曲構造とともに考察の余地を残している。築城あるいは建築の基準書としての中国の「宮造法式」(北宋の李明仲)。わが国近世の「鈴録」(相乗)「武教全書」(奉行)に相当するようなものが沖縄にあったかどうか文献的に筆者らは確認していないが、関心はあつてゆきたい。



(ロ) 断面構造 石壁前面も前述と同様直線構造は少なく、一般に下急上緩の勾配をもつ曲線形状が卓越する。本土近世城郭のような下急上急の勾配にも一部に見られるが少なく、この突縁微の1つであろう。勾配偏は域別により必ずしも一定しないが下部65°~58°、上部58°~75°の間にありここが視測された。石壁の断面形状は凡そ図2の5つのタイプに分類できよう。aは大里域その他各域の部分的石壁にみられ、bは北山域の一部又首里附近の旧座敷の石壁に、cは中域域・座喜味域その他、dは首里に、cは南山域その他域門附近にみられる。断定するのはないが、cやdが比較的新しいといわれる域に顕著なことから、また石積工法の粗細を考慮合せるとa, b, c, d, eの70%ほど技術的に高度化しているように思われる。その他先にも述べたように沖縄の域には漆(木漆、泥田漆、空漆)の存在は確認しない。



(ハ) 石積工法 残りのある比較的規模の石を壁にした石積工法。表面と加工した石を用いる布積工法、露甲積み工法などがある。単位石は小さく一般に30cm前後のものが量的に多く、その中でも880×H55×L80(mm)(勝連)103×55×65(中域)程度であった。加工石を用いた石壁面の致密さは沖縄の域の石壁のもつ一つの特徴と指摘しよう。露甲積みも完全な辺敷と分るが(も所有するものではなく、5~6辺の不整形な露甲状の単石を用いるが、それは自然の石の形状を可能な限り生かした加工である。この不整形と有いながら上下左右の単石と間隙がなく密に組みあがっている。この主の細加工は石壁の近景観を豊かなものにしている。本土城郭石壁の石積技法は「野面積み」「野面接ぎ」「切り込み接ぎ」「尊木積」があるが、そのものの名称で沖縄の石壁を表現しよか多岐疑問が残る。野面積みにしても、本土城壁のものの荒々しさもったそれは見当らない。

Ⅲ おわりに 特異な歴史を有する沖縄の域の石壁について、その平面的・断面的な構造及び石積工法についてその一般的特徴を主として考察した。もとより白粉を分布するという「域」の部の調査の結果であり、調査対象をより拡大して検討する必要があると共には、個別の域についてより緻密な構造調査と分析が必要なのはなほなほ存している。またその特異な史的展開は、それとともに技術史的問題との関連についての考察も必要となろう。今後実証と文献調査と同時的により基礎資料の蓄積を考察すべくあつてゆきたい。

文献 (1)「沖縄県の歴史」新里ほか547 (2)「グン7- その都市歴史的考察」+川、土木学会誌 Vol.60 No.6
その他 域部史、グン7論、など多くを参考にしたが、細記は省略させていただく。